

# マルホ皮膚科セミナー

2019年8月19日放送

## 「第48回日本皮膚免疫アレルギー学会 ①

大会を終えて」

奈良県立医科大学 皮膚科  
教授 浅田 秀夫

### はじめに

この度、第48回日本皮膚免疫アレルギー学会総会・学術大会を、平成30年11月16日から18日までの3日間、奈良公園内の奈良春日野国際フォーラムにおいて開催させて頂きました。奈良県での本大会の開催は初めてであり、当教室にとって大変名誉なことと感じております。

本学会はこれまでに2度の統合・改称を経ております。すなわち、1回目は、2007年に「皮膚アレルギー学会」と「接触皮膚炎学会」が「日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会」として統合されました。そしてこの度、2017年に「日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会」と「皮膚脈管・膠原病研究会」が合併し、「日本皮膚免疫アレルギー学会」として新たなスタートを切ることになりました。従って今回の大会は、2度目の統合後、初めて開催される記念すべき大会です。節目の大会にふさわしく、3日間の参加者の総数は1,000名を超え、演題数も187題と、多くが寄せられ活発な発表が行われました。

### 学会のテーマと特別企画

さて、今回の学術大会のテーマですが、「皮膚免疫アレルギー学の醍醐味を探る」といたしました。学問の原点に立ち返って、皮膚の免疫アレルギー現象の巧妙なしくみを知り、その感動を共有できるような学会にしたいという思いを込めました。皮膚の免疫アレルギー



現象は、近年めざましい勢いで解明されつつあります。そして、その研究成果が臨床応用に直結する時代になって来ましたが、それを再認識していただけるような会を目指しました。すなわち、本大会が基礎研究と臨床の橋渡しとなって、「皮膚免疫アレルギー学の醍醐味」を実感していただく機会を提供したいと考えました。

ご承知のとおり、日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会は、これまで、わが国における皮膚アレルギー疾患の診療、研究、教育の発展に大きな役割を果たしてきました。一方、皮膚脈管・膠原病研究会は、膠原病診療に携わる皮膚科医の、診療のよりどころとしての役割を担ってきました。両者の統合により、皮膚科領域の免疫アレルギー疾患をほぼすべて網羅できる学会として守備範囲が広がり、会員数も 1,750 名を超えました。そこで、今大会の「特別企画」として、双方の会の歴史を熟知し、今回の統合を主導された大阪大学名誉教授、現在、大阪市立大学特任教授の片山一朗先生に両会の歩みと、学会の今後の方向性について示唆に富むお話をいただきました。

### **特別講演**

また、今大会の目玉となる特別講演には、4 名のご高名な免疫学者をお招きしました。京都大学理事・副学長・プロボストの湊 長博先生には、免疫老化のメカニズムと疾患との関わりについて、最新の知見を紹介していただきました。また、大阪大学大学院 医学系研究科 呼吸器・免疫内科学教授の熊ノ郷 敦先生には、近年の免疫学の目覚ましい発展の歴史のなかで、わが国の研究者が果たしてきた大きな役割を振り返っていただき、その研究成果の臨床への応用についてもご紹介をいただきました。いずれのご講演も、興味深いテーマを初心者にも分かりやすくお話しいただきましたので、免疫学を幅広く、かつ深く理解する一助となったのではないかと思います。

また、海外からはスイス Zurich 大学の Lukas Flatz 先生、アメリカ Oregon Medical Research Center の Andrew Blauvelt 先生をお招きしました。Flatz 先生は腫瘍免疫学の分野でめざましい業績を上げておられる新進気鋭の先生です。本学会では、免疫チェックポイント阻害薬の代表である PD-1 阻害薬による皮膚障害と抗腫瘍効果との関係について、最新の研究成果をご紹介いただきました。一方、Blauvelt 先生は、私の米国留学時代からの長年の友人で、HIV の研究で大変ご高名な先生ですが、アトピー性皮膚炎や乾癬に対する分子標的治療の分野でも精力的に臨床研究を進めておられます。今回はアトピー性皮膚炎ならびに乾癬の病態と、その治療における生物学的製剤の位置づけについて分かり易く整理して解説いただきました。何れの講演も大盛況でした。近年の免疫学の進歩を背景に、臨床応用が急速に進んできている分野であり、参加者の関心の高さが伺えました。

### **血管炎・膠原病の基調講演**

次に、今回、新たに守備範囲に加わった脈管疾患と膠原病の分野については、それぞれ第一人者の先生に基調講演をお願いしました。川上民裕先生には、皮膚科領域の血管炎の鑑別

診断について実践的なお話をしていただきました。また藤本 学先生には、皮膚筋炎を例にとって、膠原病診療についての新しい考え方を皮膚科医の立場から提唱していただきました。いずれの講演も、膠原病や血管炎の診療における、皮膚科医の役割の重要性を再認識できる有意義な内容でした。

## シンポジウム

また、シンポジウムでは、皮膚免疫アレルギー疾患を網羅できるよう、「薬疹」、「膠原病」、「自然免疫・皮膚バリア」、「蕁麻疹・食物アレルギー」、「接触皮膚炎」という5つのテーマを取り上げました。各分野のフロントランナーとして活躍されている先生方にお集まりいただきましたので、何れのセッションでも、最新の知識を効率よく学べる機会を提供できたものと思います。

## パッチテストハンズオンセミナー

また、大会最終日には、パッチテストハンズオンセミナーを開催いたしました。いうまでもなく、パッチテストは皮膚アレルギー診療の基本手技ですが、その習得には実習によるトレーニングが欠かせません。そこで学会の支援のもと、パッチテストの知識と技術の普及を目指して、毎年3回、全国各地でハンズオンセミナーが開催されてきました。しかし、未だに需要を十分満たしているとはいえません。そこで今回から、年3回のハンズオンセミナーのうちの1回を学会大会に組み込む形で実施し、これまで参加の機会に恵まれなかった遠方の先生方にも、学会のついでに参加できる機会を提供することになりました。

本大会では会場別館にて、接触皮膚炎関連のシンポジウム、ランチョンセミナー、ハンズオンセミナーを行い、この一連の企画に参加することで「接触皮膚炎」のすべてを、習得できるようにプログラムを工夫しました。ディレクターの関東先生をはじめとして、タスクフォースの先生方には、限られた時間内で非常に効果的なレクチャーと実習を行っていただきました。その結果、アンケート調査では、参加者のほぼ全員から高い評価を得ることができました。



## おわりに

さて、大会会場の奈良春日野国際フォーラムは、周辺に春日大社などの社寺や春日山原始林を含めた世界遺産を有する奈良公園内にあります。お天気にも恵まれ、雄大な自然の中で勉強に疲れた頭をリフレッシュしていただけたものと思います。また、学会初日の終了後に

は会場の能楽ホールを活かして、狂言の公演を企画し、好評を得ました。今回の大会について、多くの参加者から、内容だけでなく、会場も素晴らしかったとお褒めの言葉をいただきました。理事長の戸倉先生をはじめ会員の皆様、奈良県立医科大学 皮膚科学教室ならびに教室同門会の皆様、それからセミナーの共催、協賛をいただきました製薬業界や医療関連企業の皆様のお力添えのお陰で、実りある学会となりましたことを心から感謝申し上げます。

